

二つのロゲイニング

本学の防災総合センター所長から電話がかかってきた。「村越さん、ロゲイニングって知っている?」当然、彼はアウトドアのことについては全くの素人だ。客員教授F先生が、「新入生歓迎フェスティバルで防災ロゲイニングをやったらいよ」と盛んに言うのだそうだ。キャンパス内には、防災上重要な施設や備蓄が随所にある。防災行動上、正確な地図でそうした場所に効率よく移動することは必須スキルだ。ロゲイニングともっとも相性がよいカバーストーリーである。「いかなる条件にも、速やかに対応しますよ」と大見得を切った。どんちゃん騒ぎの好きなセンター長、「学長杯とか出してもらって、大々的にやろうよ!」という心づもりらしい。

門外漢からのこのような関心は嬉しかったが、腑に落ちないことが一つあった。どうしてF先生はロゲイニングのことを知っていたのだろう。謎はほどなくして溶けた。静岡高校のM先生から「防災ロゲイニング」と題した学会発表ポスターのpdfが送られてきたのだ。M先生は地学の先生で、研究上のつながりで知っていた。次男の高校の副担任でもあった時に、有度山のロゲイニングに誘ったら、山岳部と一緒に参加してくれて、それ以来、「防災教育に使える」、と考えていたらしい。「3回ほど試行してようやく村越先生にも見せられるものになったと納得して、学会発表したの、ご連絡が後先になってしまい、申し訳ありません・・・」との弁、努力家のM先生らしい。

同じころ、北村ボーリンが、大島のロゲイニングの話を持ち込んできた。もともとはジオパークと情報インフラがらみの話なのだが、大島というフィールド、そして、なによりコンサルの担当者がアウトドア好きで、「じゃあ、地元高校生にも企画に参加してもらおうロゲイニングはどうだろう?」という話になった。ちょうどこの夏、鳥取の地域創造学科の高校生たちに、イベントへのオリエンテーリングの活用のワークショップをしたばかりだったので、お手伝いを即答。広大なフィールドに広がったジオサイト(ジオパークの見所)を見て回るのに、ロゲイニングほどふさわしいアクティビティーはない。自分の脚で移動すれば、地質学的スケ-

ルの大きさもより印象的だろう。

ロゲイニングが、愛好者以外にも注目を浴びるにはいくつかの要因がある。一つは、そのスケール。3-6時間というスケールは、一般の人が地域を見て回るのに適している。二つ目は、旧来の観光に飽き足らない人へのアクティビティーが求められている中、目的地の設定が地域おこしや名所巡りとマッチし、しかも自ら地図を読んで目的地を探すゲームの要素が注目されたこと。三番目に、チェックポイントの設定や地図作成にオリエンテーリングほどの手間がかからないという運営の容易さがある。加えてあげるとすれば、みなが一斉にスタートして、同じタイムリミットでゴールを目指す「お祭り性」が、日本人の国民性に合っている。

ロゲイニングがポピュラリティーを得た部分から、オリエンテーリングの普及がなかなか進まない理由も見えてくる。ロゲイニングの特性の多くは、オリエンテーリングに直接持ち込めるものではないが、一般にも受け入れられやすいロゲイニングを使って普及の階層構造を組み上げることは可能だろう。その際、正確な地図やポイント位置を使うこと、彼らが次にチャレンジする大会としてのオリエンテーリング大会を準備すること、そのようなモチベーションを起こさせるようなオリエンテーリング選手のロゲイニング大会における活躍は重要なポイントだ。

ロゲイニング愛好者のオリエンテーリングへの参入については懐疑的な意見が多いが、身近でロゲイニング出身の熱心なオリエンテーリング愛好者を見ていれば、要は僕らの工夫と熱意次第なのだと思う。草野球や草サッカーがそれぞれのスポーツの底辺を支えたように、オリエンテーリングにも底辺を支えるものが必要なのだ。

中国でのご褒美

たった5日間だが、自分のささやかな挑戦だけに集中し、おいしいものを食べて、翌日の仕事が無意識を邪魔することなくぐっすり眠って、針やマッサージで身体をケアする時間を過ごす。身体と頭にへばりついてきた眠気もない。なによりちゃんと走れるじゃないか!

学期中に休みを取るしわ寄せは大きく、事前の1週間は仕事に追い詰められていた。遠征前後のイベントと講習会を抱えて、自分の都合でなんとかするのは遠征だけ。放り出してしまいたい気持ちにも何度かなった。リレーのセカンドチームは出せるかどうかも分からなかったから、最後には、「もういい。とにかく義務は会議だけ。体調もモチベーションも優れなかったら、5日間おいしいもの食べて、足つぼマッサージして、休暇だと思って過ごそう」と自分に言い聞かせて、出発した。

到着翌日のミドルレースこそ、眠気が残っていた。この日は不快感でしばしばスピードの低下を余儀なくされた。ミスも淀みもないが、その分遅いオリエンテーリング。春にエントリーを決めた時には密かにメダルを目指していたのだが、8月中旬以降の故障で満足にトレーニングができなかったことを考えれば、11位という順位は甘んじて受け入れなければならない。

8月末の24時間ロゲイニングでさらに膝を痛め、もう二度とランニングができないのではないかという不安を乗り越えたことだ。走るのをほぼ控え、時間効率のよい自転車の山登りでトレーニングを補い、時々筋トレと短いスプリントで身体に刺激を与えてきた状態で、最低限ながらエリートの走りができた。レース後の身体への負担は大きい、「ジョグ」じゃなくて「走れた」。不安の中で自分をコントロールしたプロセスに対して結果を出せたことは何よりも嬉しい。

滞在4日目となるリレーの朝には、ここ数年感じたことのない全身の爽快感があった。スピードが上がるとミスが出る。レースは合計90秒の凡ミスをした。お世辞にもいいできとは言い難い。それでも、1・2走の中で群を抜いて速い中国の二人に継ぐタイム。

レースに出ながらでも、余計なことを考えずに過ごす5日間は何よりの休養だった。加えて、ここ10年来の友人たちと分かち合った「アジアのオリエンテーリングを支えている」という実感は、大きな活力の源になった。アジア選手権も、アジアのオリエンティアが出会い、そして互いに刺激しあう場として成長した。バンケットの盛り上がりを見ているとつくづく思う。6-8年前の僕たちのささやかな頑張りが結実し

た。

隣の円卓にいた中国選手のところ
若い選手を連れて行き、乾杯をした後、
「今回はおめでとう。でも次は負けないよ」と言ってやった。そうやって互いを刺激することが、アジア全体のレベルアップにつながるるとともに、自分たちにも跳ね返ってくるのだ。

中国の元トップエリートで、今回の日中間題に配慮して日本チームのホストについてくれたリ・ジが、何度も精神的に持ち上げてくれた。彼女は、今では深センで大学の教員をしている。彼女の教え子がメダルを取ったと聞いて嬉しそうにしていた。彼女らともオリエンテーリングや研究を通じて、更なる関係を深めていきたい。そんなささやかな関係の強化が、両国の友好にもつながる。



平均年齢 42 歳のナショナルチーム。それでも中国と同胞以外には負けないという貴塚は見た。



堪能な日本語で僕たちをサポートしてくれたり・ジ(中央)にバンケットで記念品を贈る。彼女もまた両国の関係に心を痛めた一人であつたらう。

特命班

「先生、ひと班お願いします。」途中の駅まで向かえに来てくれた国立登山研の H さんがこともなげに言う。もう数年も同研修所のお手伝いをしているが、普通の登山技術では一般人なみの僕は、いわば代走かバント要員。もっとも得意なナビゲーションの分野のみピンポイントで講習や制度設計のお手伝いをしてきた。それが班を受け持つ講師・・・。控え選手がいきなり先発を告げられたようで、落ち着かない。もっとも開校式で所長の話聞いてると、我が班はかなり特殊な任務を帯びているらしい。登山指導者の安全研修だから、班は「登攀(クライミング等)」か「読図・ナビゲーション」の二つの主題のどちらかを専攻しつつも、山で必要な技術全般の指導を受ける。一方我が 9 班は、GPS を使ったナビゲーションのカリキュラム開発である。

背景はこうだ。GPS がアウトドアでの実用レベルに達して 10 年以上が経つ。スマホでも測位が可能になり、誰もが山歩きでその恩恵に浴することができるようで、遭難の中にはそれに安易に頼ったことによるものが出始めている。その一方で、指導者の中には、「ワープロでは心がこもらない」的な嫌悪感を GPS に対して示す者もいるらしい。そのような二極化した状況の中で、GPS を活用する方針とそれに基づいた活用技術の指導カリキュラムを作成、それによって国民全体のアウトドアの安全に資する必要がある、というのが登山研修所のスタンスだ。かついい～。国民の生命を守る指導案に取り組む特命班だ!

メンバーも特命班にふさわしい。県岳連で指導的な立場にあり、実際に GPS を 5 台!も持って使いこなしている指導者と中間的な人。GPS に関心があるが、まだ導入していない指導者。そして GPS 受信機のエンジニア。さすが交友関係の広い H さん、これ以上のメンバー構成は望めない。

講習は 3 日間だが山に出かけたのは二日目 1 日のみ。初日には、GPS の基本原理や「特命」の説明から、夜の PC を使った作業。極めつきは最終日。この日は翌日の雨もあがり、絶好の秋山日よりの中、朝 7 時から会議室でカリキュラム作成のワークショップ。登山者の中で GPS を購入しそうなのはどの層? その層は登山界でどんな特徴を持っているの、彼らにどうやって情報とスキルの提供をするの? 方針とその具体的なカリキュラムは? なんだか、リゾートホテルに缶詰になって社命を賭けたプ

ロジェクトを立案しているみたい。しびれる～。

この仕事をやって気づいたことがいくつもあった。一つは、指導者の持つ古い考えは意識的に働きかけないとなかなか変わらないという認識。同じような構図はオリエンテーリング界にも当てはまる。もちろんそこには残すべき不易もあるが、流行にどう対応するかを常に考え続ける必要がある。二つ目は、国民への還元は、今や国立関係のどの分野においても必須の考慮事項になっていること。この研修会の前後、大学では財務省からの要請によるミッション再定義でんやわんやだった。最後に、これはかなり意外だったのだが、登山のように伝統ある領域ですら、指導方法を生み出すシステムティックな場や仕組みはないということ。だからこそ、我が特命班が成立したのだ。

最近、こんな仕事ばかりしている。大学では教員養成で育てるべき資質とそのためのカリキュラム構成、オリエンテーリングでは、全体構造を見据えた普及と組織の持続可能な状態の模索。そんな僕にとって、特命班の仕事は、適材適所。ふと気になったことが一つ。企画のプロセスは楽しい。でも、それは地図上でルートを決めたに過ぎない。本当の冒険とおもしろさは、そのルートを正しくたどるプロセスにある。高揚感にうっとりしている場合じゃない。



みなノート PC に向かいながら、黒板上で出されたアイデアが整理されていく。登山研前代末間の光景が繰り広げられた。

(村越 真)